

連想

津守 真

私の学校に、よそから頃いた屋根付きの自動車がある。ペダルを踏むのでもなく、足で地面の上を歩いて動かすだけの単純なつくりなのだが、ドアが開くようになつていて、子どもたちの間に人気がある。

ある日、ひとりの子どもが、この赤と黄色の自動車に乗つて、庭からホールへ、そして廊下へと動かしてきた。保育室の前まで来ると、ドアを開けて降り、部屋の中に入つていつた。じきに部屋から出てきたその子は、屋根付き自動車に乗つてホールに出てゆき、また保育室の前にもどつてきて、ドアを開けて降りた。こうして何度も出でていってはもどつて來た。これを見ていると、車からおりて何か用事を済ませ、また車に乗つて出かけゆくという、そういうストーリーをもつてこの子は動いているのではないかと思えてく

る。ただ意味もなく乗り降りしているだけではないだろう。この子の生活を遊びに再現している。実生活では子どもはひとりでタクシーに乗ることはないが、遊びではひとりでタクシーに乗ることができる。その得意さも感じさせられる。

私はその子と一緒に車の扉の開閉を手伝つたりするうちに、私自身の幼い頃のことを思い出した。それはまだ人力車が使われていた頃で、ごく特別なよその家の訪問の折に、人力車に乗せて貰った記憶である。人力車の座席は高いので、車夫が私を抱きかかえて、父の膝にのせ、毛布をかけて、布張りのとびらを閉めてフックをかけた。父にとっても重要な外出のときの緊張感がその膝の温もりと共に私に伝わつていたが、前後の具体的なことは記憶にない。ただ、乗り降りのときの感覚が鮮明で、稀な外出の緊張と興奮が布張りのとびらに凝縮されている。

こういう連想は、保育とは関係がないようにみえる。しかし、私はこの子が屋根付き自動車から降りたり乗つたりする傍において、その扉の開閉にこの子の生活経験がこめられているように思えた。この子はときどきタクシーに乗つて学校くるが、それは大きな荷物があるときや、母親が心身の具合が悪いとき、ひどい雨降りのときなどである。私にとつて、この子の生活経験の内容は未知であるが、この単純な遊びの中に、この子の世界が拡がっている。そう気が付くとき、大人の一方的な見方で行動を見るだけではなく、子ども

の側に身をおいてみようという、私自身の世界の拡がりが生まれる。

それまで私は交通整理の警官のように、オーライと言って手を振つていただけだったが、こう気が付くと、雨傘をさしかけたり、荷物を車にいれたりする、そんないろいろな試みは、子どもの側に身をおき換えてみるとことから生じる。大人の連想は、そのまま眼前の子どもにあてはまるわけではないが、眼前の知覚から大人を解放して、よりひろい世界を見る可能性を開いてくれるのに役立つであろう。

(愛育養護学校)

